

編集委員会WS 質疑応答・コメントの抜粋メモ

ワークショップの質疑応答の際にいただいたご質問やご意見等に対して、改めて、現時点（2023年4月1日）での編集委員長としての回答をいたしました。当時の回答の記憶も薄れるどころか、どこか彼方に行ってしまう、当時とは異なったり、あるいは、適切ではなかったりする回答もあるかと思いますが、どうぞご容赦ください。

文責：北神 慎司

1. 競合誌（基礎心研，Visionなど）との差別化はどうするのか。
 - 競合誌の中から本誌を投稿先として選んでいただくためには、差別化のための具体的な策を講じることがとても重要だと考えています。そのためには、今回のワークショップでお示ししたような、さまざまな見直しや改善を絶え間なく続けていくことに尽きると思います。
2. ショートレポートは、書き直すコストが大きい。現在、ショートレポートは認知心研にはないが、これから作る時に、長さに関係なく海外雑誌で落とされたものをそのまま出せたらよい。新規性とかは多少なくても、他所で落ちた原著論文の受け皿となったらよい。
 - ショートレポートの新設については、現在も議論を続けているところですが、まず、査読の評価のポイントとして、必ずしも新規性を必要条件とはしないと考えています。「長さに関係なく…そのまま出せたらよい」というご意見については、たとえば刷り上がり4ページという制約があるからこそ「ショートレポート」であると考えておりますので、既存の投稿種別にある原著や資料としてご投稿いただければと思います。
3. 独自性，有用性は主観的な要素が大きい。信頼性（妥当性，統計的な妥当性，論理性）には主観要素は入らない（入りにくい）。PLOS ONEやScientific Reportsのように、信頼性の基準は譲れないと思う。
 - 独自性，有用性はご指摘の通り、主観的な要素が大きいということには同意いたします。ただし、主観的であるからといってそれらを評価基準から排除するのではなく、「査読の基本方針」で「独自性，貢献可能性，有用性のいずれかを見つけ出す。」と定めたとおり、「いずれか」を満たせばよいという考えのもと、複数の観点から評価を行っていこうと考えています。

4. 展望論文などを増やす予定はあるか。
 - すでに、論文種別として「展望論文」は存在しています。ここ最近の傾向として、展望論文の投稿・掲載も増えてきたように思います。いわゆる実験論文に限らず、展望論文についても、投稿が増えることを期待しています。

5. 投稿した原稿が、指導教員の目が通っていないようなクオリティのものもある（オーサーシップ問題）。データに対応しない結論の論文をチェックする必要がある。
 - いずれのご意見についても同意いたします。実際に、オーサーシップの問題として、指導教員をはじめ、連名者のチェックが入っているとは思われない投稿論文も散見されます。言わずもがなのことかもしれませんが、投稿の前には、連名者だけでなく、複数の第三者に草稿をさまざまなレベルでチェックしていただくことを強くおすすめいたします。

6. レジレポとかの仕組みを導入すると編集委員の仕事が増えすぎることが心配。
 - まずは、ご心配いただき、どうもありがとうございます。レジレポや出版査読などの大きな改革は、副理事長の伊東裕司先生が委員長である「ジャーナル等特別検討委員会」で議論が行われています。その議論の結果次第では、編集委員の負担を軽減するために、現行の20名体制からの増員を検討する予定です。

7. 閲覧数の多さなどを公開し、認知心理学研究のインセンティブにならないか。
 - J-STAGEでは、過去2年間のアクセス統計レポートをダウンロードできる仕様になっています。ご指摘はごもっともだと思いますので、公開の方法をはじめ、前向きに編集委員会で議論したいと思います。

8. 編集委員の人も、出版後査読（読者に評価を委ねる、F1000research, するとしたらどうする？）とか、出版についての論文を読んで欲しい。
 - 出版後査読は、従来の査読とは異なる複数のメリットを持っていると思います。したがって、上記の「ジャーナル等特別検討委員会」および編集委員会で議論したいと考えています。

9. 編集委員会：認知心研の位置づけをどうしたいのか（何でも拾う雑誌にするのか、紀要との違い）
- 前編集委員長からの引き継ぎとして、投稿数が少なすぎるという問題をまずは解決したいと考えています。「何でも拾います！」と軽々に言うことは難しいものの、「論文の評価は読者に委ねる」という査読ポリシーの大方針にしたがって、言わば、雑誌の「身の丈にあった」査読を心がけたいと思います。（副編集委員長の光藤先生によれば、2007年ごろの箱田先生との雑談で「当初、認知心研は「質」を重視するスタンスだった」そうです。）
10. 今回のWSで（出た質問は意見の大半）は海外に出すような人の意見。日本語で書いている人たちの中で上の方のターゲットにするというのもありうる。紀要より上の位置を狙うとか。
- 『認知心理学研究』では英語での投稿も受け付けてはいますが、やはり和文誌という位置づけが妥当であると考えますので、想定しているメインターゲットは、大学院生（学部生）・研究員などの若手層であり、初めての投稿先として本誌が選ばれたら、という思いはあります。ただし、これはあくまでメインとして、というだけであって、幅広い層から、多くの投稿があることが理想的だと考えています。
11. 差別化はそんなに気にしなくていい気も。載りやすくするという方が、投稿数を増やすという目的にはよいのでは。査読者は、個人的には厳しい人が多いと感じる。
- 「そんなに気にしなくてもいい気も」というご意見を聞くと、正直なところ、少し気が楽になります。他誌との差別化については、投稿数を増やすためにさまざまある方策の一つであると考えておりますので、その他の方策とともに、引き続き、編集委員会で議論していきたいと考えています。また、査読の厳しさについて、体感的には、厳しい人が多い、というよりは、厳しい人もいるという印象を持っています。厳しいことは悪いことではありませんが、本誌の学会誌としての水準に見合う査読になっているかについては、担当編集委員、幹事会メンバー（編集委員長・副編集委員長・事務局）が積極的に介入することによって、適正な厳しさを担保していきたいと思います。

12. アラを探すような査読もあるが、そういうコメントを論文本文の「限界」などにまとめて記載してもらってもありうる。
- これは実際に担当編集委員として査読プロセスにかかわった先生からのコメントですが、査読ポリシーを策定する以前から、査読者からの報告について時間をかけて精査した上で、担当編集委員としての査読結果の報告をまとめていると認識しています。
13. 貢献「可能性」の部分に注目して欲しい。
- これは副編集委員長の森田先生からのコメントですが、上記「3.」とも関連して、投稿論文を評価する際に、「貢献性があるか、ないか」という二値的な判断ではなく、あくまで、貢献の「可能性があるか」というアナログな視点での判断を行ってほしいということであると思います。投稿者（著者）自身が明示的に貢献性について言及することもそうですが、査読者が投稿論文の中からその可能性を見つけ出すということがもっとあってもいいのではないかと考えます。
14. 誤りを許容する場合、後で読者が誤りを検出できる仕組み、つまり透明性が必要だと思います。例えばデータをオープンにするなどして透明性を担保できれば採択可、といった意思決定をすることも想定できると思いますが、このあたりのポリシーについてはどのようにお考えでしょうか。
- 再現性問題に端を発したデータの透明性の担保については、心理学のみならず、多岐にわたる分野で重要な問題であると認識しています。したがって、ジャーナル等特別検討委員会および編集委員会で積極的に議論していきたいと考えています。
15. 実験をやり直すレベルのものであれば、追加実験を要求するのではなくリジェクトしたうえで再投稿可とするほうが手間が少なくてよいと思うのですが、そういった方針はお考えですか？
- 改稿期間が限られていることを鑑みて、実際に、リジェクトした上で再投稿を勧めるというケースはこれまで複数あります。ただし、この方針を厳密化することで、むしろ、採択までの期間が長くなる可能性も考えられます。そこで、「追加実験の要求はできるだけ避ける」ということは明文化はしていませんが、これを前提として、査読者向けの「著者へのコメントについての留意点」に「実験や調査等、データ収集の追加を要求するときには、現状の記載内容で主張できること

の価値を評価し、追加が採択の前提要件なのか、または論文の説得力を上げるために望ましい条項なのかを明示してください。」という説明を行っています。